

Title	接頭辞「カタ(片)-」の意味論：双数と欠如詞の観点から
Sub Title	Sémantique du préfixe "kata(片)- " en japonais : du point de vue du duel et du privatif
Author	藤田, 知子(Fujita, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.103, (2012. 12) ,p.194(69)- 211(52)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川口順二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01030001-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

接頭辞「カタ(片)-」の意味論 ——双数と欠如詞の観点から*——

藤田 知子

0. はじめに

本稿は現代日本語における接頭辞「カタ-」の意味の記述を目指している。カタテ(片手), カタアシ(片足), カタミチ(片道), カタコト(片言)などに見るように, 「カタ-」は和語系の接頭辞として語基(Xと記す)と結合し, 派生語「カタ-X」をつくる。『岩波国語辞典』(第6版)は「カタ-」の意味を次のように記述している。

- (1) 二つ揃ったものの一方(だけ): 片や, 片一方, 片手, 片親, 片道, 片思い, 片だより
- (2) 完全な形に対して欠けていること
 - ア. 不完全: 片言。
 - イ. 位置的にかたよっていること: 片田舎, 片隅
 - ウ. わずか(ばかり): 片時

いずれも日常よく接する意味と用例であり, 「カタ-」は多義的である。

「カタ-」を取り上げた研究としては工藤(1998, 2005)と田中(2001, 2012)が重要である。工藤はかつて印欧語に広く存在した文法的数のひとつである双数(dual)との関連から, 古代日本語にまで遡って「カタ-」の意味を洞察する。田中は, たとえばカタオヤ(片親)の例に見るような「ふたつで一揃いのものの一方の欠如」を強調する用法に注目し, とくに差別語の観点から鋭い考察を加える。他方, 「カタ-」を直接取り上げているのではないが, 国語学における語構成論の研究史を跡づけた斎藤・石井(1997)¹⁾,

および、理論の構築と適用を試みる斎藤(2004)にも複合語・派生語の分析について教えられるところが多い。

以上の研究に導かれながら接頭辞「カター」の意味と用法の分析を試みる。

1. 語基Xの性質

接頭辞「カター」は単独で用いられることはなく、つねに語基Xをよび求める。「カター」の意味はXがになう言語的性質と切り離して論じることはできない。まず、本稿が分析対象とする現代語で「カター」がどのようなXと結合するのを見ておこう。『日本国語大辞典』(第2版)の見出し語のうち現代日本語でも使用する用例、および新聞、雑誌、小説などからの採用例、さらにインターネットによる検索例を見て気づくことは、Xの語種が和語だけでなく、漢語、カタカナ語にも及んでいることである。

1. 1. Xの語種の拡張

1. 1. 1. Xが和語の場合

『大辞典』の見出し語のほとんどはXが和語である。Xは名詞が多いが、動詞の連用形(名詞形)もある。主なものを挙げてみよう(括弧内の数字は『大辞典』が示す初出年代)。

まず、Xが名詞の用例には次のようなものがある。

- ・カタ手(8c後半・万葉集), カタ腕(1603), カタ目(1069), カタ足(974),
カタ道(13c平家物語), カタ恋(8c後半), カタ棒(1802), カタ親(1603),
カタ時(9c末, 竹取物語), カタ言(947蜻蛉日記), カタ手間(1818), カ
タ田舎(10c伊勢物語), カタ隅(970-999頃), カタハシ(端)(712古事
記), カタ仮名(970宇津保物語), カタ意地(16c), カタ腹痛い(1014), カ
タえくぼ(1891)

現代では地名・人名としてしか用いないものや、明らかに差別的な表現もある。

- ・カタ山(720), カタ岡(8c後), カタ瀬, カタ桐
- ・カタワ(片端・片輪)(970-999宇津保), カタちんば(1770), カタびっ

こ(1976), カタイざり(1005)

少数ながらXが動詞連用形(名詞形)のものもあり, 名詞と動詞の両方をもつこともある。

- ・カタ割れ(1529), カタ泊まり(初出指示なし), カタ手落ち(1846-68),
カタ落ち(1477), カタ開き(1939)
- ・カタ付け(1813)／カタ付く(1694), カタ付ける(1603-04)
カタ寄り(8c後半・万葉集)／カタ寄る(8c後／1005)

このようにXが和語の用例は古くから用いられ, 「カター」の意味も多義的である。

1. 1. 2. Xが漢語の場合

Xが漢語で『大辞典』の見出しとなっているのは三語しかない。まず形式名詞の「ホウ(方)」と「メン(面)」である。

- ・カタ方(カタエ8c後半・万葉集/カタカタ1221宇治拾遺/カタホウ
1791), カタ面(1921)

三つ目は「カタ貿易(1936)」であるが, 明らかに翻訳語である。採集例では「カタ麻痺」, 「カタ大腿切断」, 「カタリン(片輪)走行」, 「カタヨク(片翼)だけの天使」などがあるが, やや専門的な語彙と言えよう。「カタ麻痺」は「片側麻痺」, 「カタ翼」は「片方の翼」のように意味を変えずに形式名詞を補うことができ, その短縮表現と考えられる。ここでの「カター」は「二つ揃ったものの一方」の意味しかもない。

1. 1. 3. Xがカタカナ語の場合

Xがカタカナ語の用例は『大辞典』の見出し語には一例もない。インターネットの検索エンジン(google, yahooなど)を通してはじめて目にする用例である。

- ・(コンサート用ピアノ椅子)無段階ねじ式, 片ハンドル、(懐中時計)
片ガラス、(スカート)片プリーツ、
(電車のパンタグラフ)片パンタ降下・3パンタ化実施

こうした例の出所は商品カタログや製品の説明書である。ここでは日常の言語生活では話題になりにくいモノの細部, 形態, 性状なども命名, 言

及の必要が生じる。新物新語の傾向も強く、コンパクトな表現が好まれる。漢語の場合と同様、ここでの「カタ-」も「二つ揃ったものの一方」の意味しかもたず、形式名詞「ホウ（方）」「ガワ（側）」「メン（面）」を用いた表現の短縮形と考えられる。

以上の観察から次のことを確認できる。(1) 現代日本語における「カタ-」は結合するXの語種を広げ生産的である。(2) 「カタ-」が多義的なのはXが和語のときに限られる。(3) Xが漢語やカタカナ語のとき「カタ-」は「二つ揃ったものの一方」の意味しかもたず一義的である。

1. 2. Xの言語的性質

このように「カタ-」は現代語において生産力をもち、Xが和語のときも意表をつくような使用例に出会うことがある。いくつか例を挙げておこう。

- (1) (成田空港に着くとほっとする) そして首に掛けていたショルダー・バックを片肩に掛け直したりするのだ。(別役実, 朝日新聞 060611)
- (2) 日頃から口を閉じて、鼻呼吸をする習慣をつけましょう。とくに片鼻呼吸をすると、どちらの鼻がつまっているかよくわかり、それを治すことができます。(広池秋子『ヨーガ健康法』108)
- (3) ダムのため削がれし山の痛み知る
片乳のみの我なればこそ (波汐朝子, 折々のうた, 朝日新聞 040828)
- (4) 旅館らしくない。仲居さんがいない。布団は自分で敷く。サービス料はない。朝食だけの「片泊まり」²⁾。(朝日新聞030602)
- (5) 現代人は偏り運動がその生活の主体となっております。(…)それゆえ、その調節が必要です。自動車のタイヤでも、片べりを調節すると長くもつのです。(野口晴哉『整体入門』117)

だが言うまでもなく「カタ-」と結合できる語は「カタ-」が要請する一定の言語的条件を満たす語に限られる。我々が意味を実感できるのはあくまでも合成語「カタ-X」全体の意味であり、そこから「カタ-」の意味を推測することになる。既に見たように、「カタ-」には「カタ-目」「カタ-手」

などのように「二にして一なるXの一方」、すなわち、二つの構成要素からなる全体のうちの一方を指す用例が多い。分析の出発点として「カタ-」の使用条件を次のようにまとめてみよう。

- ① Xは「二にして一」なる全体として造られていなければならない。
- ② 「カタ-X」は「二つ」の構成要素のうちのどちらか「一つ」を指示する。

①の条件が満たされていて初めて②の指示が可能になる。事実、「カタ-」は単なる二数のうちの一つを指示することはできない。

(6a) (二個の同じ湯飲みについて) これ/これひとつ/*カタ方ください。

(6b) (二個の違う湯飲みについて) これ/*カタ方ください。

また均質な全体の半量を指示することもできない。

(7) (パン屋で) バゲット半分/*カタ方ください。

いずれも使用条件①に抵触し「カタ-」は単なる数量詞ではないことを示している。したがって「カタ-」の意味を明らかにするには語基Xが担う言語的条件①、②を精査する必要がある。

2. 「カタ-」の意味と用法

「カタ-」の用法をまとめると、(A)「二にして一」なるXの一方（「カタ目をとじてごらん」）、(B)「二にして一」なるXの一方の欠如（「カタ目の男」）、(C)その他の意味（「カタ時」, 「カタ田舎」）の三つに分けられる。AとBは後述するように印欧語の双数との関連が明確な用法であり、両用法は密接に関連する。Cは双数との関連が明確でない用法である。また、A、Bは現代語において生産力があるが、Cはほぼ固定した表現しかなく生産力はない。本稿では紙数の都合上、A、Bに分析の対象をしぼり、その使用条件を明らかにする。

2. 1. 用法A: 「二にして一」なるXの一方

用法Aは印欧語の双数と深い関係があり、「カタ-」は「二にして一」なるXの一方を指示する。ここではさらに考察を深めるため、「二にして一」

なるXが造られるレベルを (i) 「自然」 レベル, (ii) 社会的・文化的レベル, (iii) 偶発的レベルの三つに分けて検討する³⁾.

2. 1. 1. 「自然」 レベル

自然界には人間の身体をはじめとして、「二にして一」なるツイ(対)を形づくるものが少なくない。いわゆる印欧語で「自然双数」と呼ばれるものであり、目、耳、手、足、肩などの人間の身体部位、その部分の装身具(靴、靴下、手袋、眼鏡など)などの例が挙げられる。「カタ-」はそうした「自然」の造形が機縁となつてつくられる「二にして一」なるXについて、二つの構成要素の一方を指す働きがある。ここでの「二」なるものは一般に同形、同質、同資格のものであり、二つの部分(半分づつ)が協調して「一つ」の働きをなし、外形的にも「一つ」の全体をつくるものである⁴⁾。例として「目」を取り上げよう。

(8) 目をつぶってみてください。

こう言われたらふつう両目を閉じるだろう。「目」は左右にふたつあり「二にして一」なる全体をつくり、二つが協調して「一つ」のはたらきをするからである。

(9) カタ目をつぶってみてください。

ここでは目の一方を閉じるが、左右どちらでもよく互換性がある。

(10) (急性結膜炎) 片目が利かないというそれだけの理由で、鬱々として楽しめません。(…)さらに、もう片方の目にも伝染し、いまや両眼ともウサギ目状態。(内田樹・平川克美(2004)『東京ファイティンゲキッズ』206)

この例では「カタ目」と「リョウ眼」が対比的に用いられている。「カタ-」は二つの構成要素の一つを、「リョウ-」はそのすべて(二つとも)を指している。またそれぞれを「カタ目」「もうカタ方の目」のように言及しているが、後者を「方」を用いずに「*もうカタ目」とするのは不自然である⁵⁾。

(11) Q (4歳児)右目は正常でしたが左目は遠視と乱視が強く視力が0.3で弱視と言われました。

A (...) 本人はその見え方が当たり前で、特に片目だと親も気づきににくいのです。

Q 治療法は。

A ものをしっかり見る訓練をします。この子の場合なら、眼鏡でピントを合わせ、正常な方を眼帯などでふさいで、弱い方の目を強制的に使わせませす。(朝日新聞041115)

ここでも「カタ目」か「リョウ眼」かが問題になっており、二つの構成要素のどちらかの指定は、左右の指示、および、「正常な方」「弱い方」という性質形容によってなされている。

このように、「カタ-」は「二にして一」なるXの構成要素の一方を指示するが、「リョウ-」との対比から明らかなように、指示しないもう一方の構成要素の存在を常に喚起する。したがって田中(2001, 67)と工藤が指摘するように、本来一つの要素しかもたない「一つ目小僧」のような場合は「カタ-」は使用できない。また、一方の目を失った人に対しても「カタ目をつぶって下さい」とは言えず、単に「目」を用いるだろう。

印欧語における双数についてはフンボルト(2006, 7-44)と泉井(1978, 138-139)の名著があり、スラブ諸語については徳永(1959)の論考がある。それらによれば印欧語の双数は原則として感覚的に認識される具体的な物に対してのみ適用された。その代表例が「目」「手」「足」などの「自然双数」であり、左右・水平に並置される可視的な対をなすものが多い。また「ツイ(対)」「クミ(組)」「ソロイ(揃い)」「ペア(pair)」、「カップル(couple)」「セット(set)」などの集合体をあらわす名詞も双数性を帯びている。OEDには英語のpairについてすでに“… usually corresponding to each other as right and left (less frequently as upper and under)”という指摘がある。双数が上下より左右に存在する具体物について適用例が多いのは、自然界には上下より水平に対置されるものが多いためであるという。

では上下の配置で「二にして一」なる例にはどのようなものがあるだろうか。左右に比べ、確かに例は少ない。ここでは「アゴ(顎)」「クチビル(唇)」「マブタ(瞼)」を取り上げよう。

「アゴ(顎)」は「ウワ-アゴ」と「シタ-アゴ」から成り、二つが協調して一つのはたらきをする。では「カタ-アゴ」は可能であろうか。日常の語感にはなじまないが、インターネットで検索すると歯科の料金表の例がヒットする。

- (12) (阪大矯正歯科) 装置料 舌側弧線装置(カタ側)...円, 床矯正装置(片顎)...円, 上顎前突/上あごの炎症//レーザーホワイトニング 片あご...円

たしかにこうした文脈では上下いずれかの顎を指す必要がある。「片顎」は「ヘン-ガク」もしくは「カタ-アゴ」と読み、専門用語としては「ヘン-ガク」が多く用いられるという。

同様にクチビル(唇)も「ウワ-唇」と「シタ-唇」から成り、上下が協調する。「カタ-唇」は難しく感じられるが、ネット上には用例がある。

- (13) 無口で俯向き勝で、癖にはよく片唇を噛んでいた。母親は早くからなくして父親育ての一人娘なので、はたがかえって淋しい娘に見るのかも... (岡本かの子「金魚撩乱」in 青空文庫 www.aozora.gr.jp)

- (14) あの、片唇をふっとあげて笑う、冷酷な微笑のかっこよさといったらありません。

二例とも「カタ唇」は唇の左右の一方の端を指しており、表情の描写として用いられている。ここでの「カタ-」は発話者の視点移動によって「クチビル」をいわば左右水平の「二にして一」なる造形物として捉え直し、その一方を指していることがわかる。

他方「マブタ(瞼)」は左右上下に四つあり、四つで一つ全体をなす。「ウワ-まぶた」、「シタ-まぶた」は自然であるが「カタ-マブタ」はどうだろうか。インターネットではやはり美容整形のメニューがヒットした。

- (15) 上まぶたのタルミ, 下まぶたのプチ若返り

二重まぶた~オリジナルクイック法

両眼まぶた ...円~/片まぶた ...万円~

「フタエ-まぶた」は上瞼についてしか言わない。したがってここでの「カ

ターまぶた」は左右の上瞼のいずれか一方を指し、「リヨウメ(両眼)-まぶた」と対立する。構成要素が四つあるように見えるこの例は、左右二つで一つの全体をつくる通常の場合に他ならないことがわかる。

以上の観察から、「カタ-」は左右水平の配置につよい親近性をもつと同時に、上下配置の「二にして一」なるXについても、表現の必要があればその一方を指示することがわかる。

では前後に位置する「二にして一」なるものはどうか。自転車やオートバイの車輪は前後二つで一つの全体をなす。それぞれを「前輪」「後輪」と呼んで指定できるが、「カタ-リン」もしくは「カタ-ワ」は使用しにくい。三輪車やカメラの三脚のように「三にして一」なる全体が造られる三数性を帯びたもの、犬猫など四足動物の足や自動車の車輪のように「四にして一」なる全体をなすもの、たこやいかの足のように「八/十にして一」なる全体をなすものいずれについても「カタ-」は使用できない。

だが既に予測されるように、発話者の視点移動により「二にして一」なる全体としての捉え直しが必要かつ可能な文脈では「カタ-」は容認される。

(16)(...)先頭車両の右車輛が浮いて片輪(カタ-リン)走行になり、その後、車輛は横転に近い状態で線路左側に飛ぶように脱線した可能性が高い(...) (朝日新聞050430)

(17)車は片輪(カタ-リン)が側溝に落ちたことからハンドル操作ができなくなり、ブレーキも効かない状態になったとみられている。

(16)は福知山線の鉄道事故についてである。電車の車輪はふつう8車輪あり、通常は横方向から細長いものとして全体を見る。だが、「カタリン(片輪)」は車輛を進行方向から見たときの片側の車輪を言っているのであり、ここでは左側(の4車輪)しか線路についていなかったことを意味する。(17)も前輪、後輪ではなく、左右いずれかの側の車輪を指している。

以上の分析から、「カタ-X」において語構成要素Xがになう言語的条件は、Xに意味論的に固定的に定まったものではなく、発話者の表現の意図により語用論的につくられるものであることがわかる。Xは自然や事物の

造形の制約を受けながらも、あくまでも言語使用のレベルで発話者の視点から「二にして一」なる全体として捉えられ、「カタ-*X*」はその構成要素の一つを指す。「自然」レベルと留保を付けたのはそのためである。

B. 文化的・社会的レベル

*X*が文化的・社会的な機縁によって「二にして一」なる全体としてつくられる場合もある。すでに(6a,b)で見たようにたとえば茶碗が単に二個あるだけでは「カタ-」は使えない。だが、夫婦茶碗であれば「カタ-」の使用は自然になる。

(18) (夫婦茶碗) カタ方 / 小さい方 だけ欲しいんですが。

夫婦茶碗は大きさ、色、柄によってペアになった二個の茶碗であり、西洋にはなく日本固有のものであるらしい。二つの要素が文化的・社会的契機によって一組（揃い、セット）として定式化・慣習化され、「二にして一」なる全体をなしている。「カタ-方」はこうした全体についてその構成要素のどちらか一つを指示する⁶⁾。

(19) 「拒食症の子どもたちの病棟では、親は総じて夫婦仲が悪くて、子どもが入院してもぜったいに夫婦一緒にはお見舞いに来ない。片方 ずつしか来ない」という話をされていました。（三砂ちづる『オニババ化する女たち』210）

(20) とくにわが家は双子の男の子だったので、日曜日などに片方が寝ついても、もう一方が起きているといった具合でこちらの休むひまがない。（諏訪哲二『オレ様化する子どもたち』161）

(19) では男女という異形・異質な二つの存在が結婚という文化的・社会的機縁によって一組の夫婦として結ばれ、「カタ-方」はそのどちらか一人を指している。「カタ方-ズツシカ」と助詞を重ねることによって「リョウ方」との対比を強調し、ここでも「カタ-」は必然的に、指示しないもう一つの構成要素の存在を喚起している。他方、前項の「自然」レベルの用例と異なり、ここでは「*カタ-夫婦」「*カタ-双子」⁷⁾のような「カタ-*X*」の表現は不可となり、形式名詞「ホウ（方）」の使用が義務的となる。

C. 偶発的レベル

本来、無関係な二つの要素がなんらかの偶発的機縁によってまとまりをなし、一つの全体として扱われることがある。

(20) 昨年の「父の日」に、2個の小包が我が家に届いた。片方には焼酎のセットが、もう片方には革の財布が入っていた。差出人を見た時、涙が出て止まらなくなった。(朝日新聞050328)

「同時に届く」という偶然によって二つの小包は一つの全体として扱われる。「カター方」「もうカター方」はそうした二つの構成要素のそれぞれを指している。ここでも「*カター-小包」は無理であり、「ホウ(方)」が必須である。このように「カター」の使用条件は形式名詞「ホウ(方)」のそれとかなり重なっていることがわかる⁸⁾。

以上の分析から「カター」は三つのレベルにおいて動機づけられた「二にして一」なるXについてその一方の構成要素を指示すると同時に、指示しないもう一方の構成要素の存在を常に喚起する。そのため現代日本語では「リョウ-」と対立することが多い。

3. 2. 用法B:「二にして一」なるXの一方の欠如

「カター」の二つ目の用法は「二にして一」なるXの一方を指示することに変わりはないが、指示する構成要素が現存せず、欠如していることを特徴とする。たとえば「カター-目の人」は二つあるべき目の一方が「ある」のではなく、一方を「失った」もしくは「ない」とパラフレーズされる。ライズィ(1994)が提唱する意味カテゴリー「欠如詞」に当然ながら分類される用法である。

(21) しかし、両親は、まだ、左手のなくなったことは知らない。突然ではおどろくだらうから、まず手紙で知らせようと思った。だが、文で書くのもメンドウクサイ。一目瞭然をねらって、片手(a)のない自画像をハガキにかいて送った。戦死した人もおおいのだから、片手(b)の一本ぐらいと、ほくはわりと気軽にかいて送ったわけだが、親にしてみたら大変なショックだったようだ...ただでさえ落第生なのに、左手までなくして、終戦の混乱期をどうやって生きていく

のかというわけだ。(…)やや変人の気味のある父が、「しげるは前から横着者で、両手をつかうところでも片手(c)でやってきたからいまさら片手(d)になってもこまらんじゃろう」などとオカシなことをいう。(水木しげる『ほんまにオレはアホやろか』106-107)

戦争で左腕を失った漫画家水木しげる氏の自伝である。四例ある「カタ-手」のうち(c)は「二にして一」なる「手」の一方を指す用法Aに当たる。残る三例が用法Bである。(a)「カタ手のない自画像」で問題になっているのは残っている方の手(右腕)ではなく、失った方の手(左腕)である。「*カタ手のアル自画像」が容認しがたいのは「二にして一」なる手の一方について「アル(存在する)」と断定すると、自画像には手がないのが本来の姿であるかのような印象を与えるからである。また(d)「カタ-手になっても」は「カタ手を失っても」と注解できる。

(b)「カタ手の一本ぐらい」の文章は、「命を落とすことと片手を失なうことを比べれば、後者は大したことではない」と注解できる。ここでも「カタ手」は「失った方の手」を指している。だが、「カタ手-ノイッポン-グライ」と続くことによって、手を失うという出来事の望ましくなさを両親への配慮から最小評価し、軽く受け流そうとする発話者の主観的な捉え直しの意図が読みとれる。ここでは「*カタ手の二本ぐらい」という表現はなく、「カタ-手」を二本合わせても「リョウ-手」にはならない。

ところで「二にして一」なるものの一方が欠如しているにもかかわらず、欠落、不在、不完全感を感じさせず、それ自体で完全な一単位と感じさせる表現がある。工藤(2005, 111)と田中(2001, 126-127)が指摘する漢語系の接頭辞「セキ(隻)-」である。現代語での使用は稀であり、筆者自身にも身についた語感はない。だが漢文調の改まった書き言葉では今日でも用いられる。

(18) (風林火山の山本勘助) 隻眼の軍師、一人旅立つ (朝日新聞0701)

(19) あの丹下左膳でえ隻眼隻腕の化け物は、なるほど世の中に役にた
たぬ代物じゃが、しかし、(林不忘『丹下左膳』日光の巻 in 青
空文庫)

(20) 或る日緑川博士は、或る会合で、例の隻脚隻腕の猛将大竹中將の席のとなりに座ったのである。(海野十三『大宇宙遠征隊』in 青空文庫)

(18) の「セキ-眼」は「二にして一」なる目の一方を失ったことに変わりはないのだが、残った方の目が際立って認知され、そのみで充足する完全体として欠落を感じさせない。「カタ-目の人」と言う「リョウ-目」との対比があるだけに欠如感、不全感を伴うが、「セキ(隻)-」にはそれがない。「セキ(隻)-」は上例のように軍師、剣客といった威信のある存在について用いられることが多いのも不思議はない⁹⁾。「セキ(隻)-」が示すニュアンスは既に見た「ヒトツ-目小僧」や「イッポン-足のかかし」のように元来一つしかない場合とも異なる。

(21) 右足を高く上げてタイミングをとる王貞治選手の打法は一本足打法と呼ばれた。

王選手はもちろん両足を使う打者だったが、「*カタ-足打法」とは呼ばず、「イッポン-足打法」と呼ぶ。「カタ-足打法」と言うとは必然的に言及しないもう一方の足の存在が喚起され、「リョウ-足」は使えないという不全感をともなう。軸足一本で完結するかのような力強さを表現するのに「カタ-」はふさわしくない。

このように現代語では「カタ-」は類義の接頭辞「イチ(一)-」「ヒトツ-」および「セキ(隻)-」とともにニュアンスを表現しわけているのである。

2. 2. 1. 差別的用法

既に見たように、身体部分には自然の造形に動機づけられた「二にして一」なるものが多く、構成要素が二つ揃っていることはあるべき規範として受け止められる。そこからの逸脱は欠陥、欠損、異常、不完全といった望ましくないマイナスの評価と結びつきやすい。また、いったん失えば自分の意志で取り戻すことは不可能であり、しかもその欠如は視覚に訴えるものである。こうした非意志性、恒常性、不可逆性、可視性に特徴づけられる本用法の「カタ-X」はどうしても差別的文脈で用いられることが多く

なる¹⁰⁾。

左右の一方が不揃いだったり不自由であることの表現に「ちんば」「びっこ」がある。現在では差別表現とされる。

- (22) 土屋四友子を送りて鎌倉までまかるとて 霜を踏んでちんば引く
まで送りけり。(松尾芭蕉、「茶の草子」)

足以外の身体部分や履き物、靴下などの装身具等についても「揃うべきもう一方と組になっていない」の意味で用いられる。

- (23) すると、まだ四五遍しか会っていなかった朝子を顧み、大平は、
敏感な顔面筋肉の間から、濃やかな艶のある、右と左と少しちんば
なような、印象的な眼で笑いかけた。(宮本百合子「一本の花」
in 青空文庫)

- (24) どこの洒落もののいたずらか、男と女との靴が、一組一組、みんな
ちんばに、てんでばらばらな途方もない片方ずつによせあつめて
散らかされている。(宮本百合子「十四日祭の夜」in 青空文庫)

すでにこれらの語自体に左右の一方が不揃いであるという意味があるが、さらに「カター」を加えて、「カター-ちんば」(初出1770)、「カター-びっこ」(1976)とすることがある。『大辞典』によれば人にも用いるが、履き物などの装身具に用いることが多い。

- (25) またある時、片ちんばの下駄をはいてわずかに三町ばかり歩いた。すると自分の腰から下が、どうも自分のものでないような、なんとも言われない情けない心持ちになってしまった。(寺田寅彦「柿の種」in 青空文庫)

- (26) 片跛(かたびっこ)に釣り上った眉。(夢野久作「一足お先に」in 青空文庫)

ここでの「カター」はXの語彙的意味にすでに含まれている左右の不均衡を再度繰り返し強調しているように思われる。「一方」に対する「カター方」, 「意地をはる」に対する「カタ意地をはる」(頑固に意地を通すこと, そのさま), 「手落ち」に対する「カター-手落ち」(処置や配慮が一方にだけかたよること)などの表現にも類似のニュアンスが感じられる。

以上の用例は言ってみれば事柄の記述に主眼があり、差別的なニュアンスはそれほど感じられない。だが次の呼格用法は明らかに差別的な使用である。

(27) 幾代の左脚が短いことを母親はふびんがって、自分のせいのように謝ることがあった。(…)「一ヶ月も入院して、命があったのが見つけものと言われた。なア、片脚が少々短うても、気にせんこっちゃ」

小学生のとき田舎道を帰っている途中で、男の子に、ちんば、ちんば、とはやしたてられたことがある。(佐多稲子「水」『日本の短編上』p.264)

さらに身体の障害をもつことを言う語として「カタワ」がある。

(28)「未練というわけじゃあねえが、おれもあの女ゆえにこの腕を一本なくして、生れもつかねえ片輪にされちまったんだ、身から出た錆だと言えればそれまでだが、どうもこのままじゃあ済まされねえ」(中里介山「大菩薩峠 市中騒動の巻」in 青空文庫)

「カタワ」は差別専用の語である。田中(2001, 63)は差別的意味は花鳥風月については低く、モノ、コト、ヒトの順に強くなり、とくにヒトの身体名称、親族名称について激しくなると指摘している。既述のとおり身体語彙は自然の造形を契機とするが故に強い規範性を帯びやすい。「カタワ」はそうした身体語彙と結合し、二つ揃うべき要素の一方の欠如を表現するため事柄の中立的、客観的な記述たりえず、その表現を向けられた人の心に強い痛みを引き起こす差別表現となりうる。その語を発すること自体が言語遂行的にすでに差別的となる。(28)のように発話者が自分自身に自己卑下ないし自嘲的に用いることもある。現代語では差別表現とされ、マスコミ等でも見聞きすることは稀になっている¹¹⁾。

「カタワ親」も欠如を示す用例である。「親」は文化的・社会的機縁によって「二にして一」となる存在である。

(29) 私はこの子の*カタ親／父親／母親です。

(30) 離婚は何度も考えたが、一人娘を片親にしたくない、結婚式は両親

そろって出席してやりたい、その一心で思いとどまってきた。(朝日新聞040828)

「カタ-親」はふつう親自身ではなく、子について用いる。だが、子であっても既に社会的に自立した大人になっていれば、親の一人がいなくても「カタ-親」とは言わない。「カタ-親」は(30)のようにまだ社会的に自立していない子について親の一方が欠けていることを意味する。親は「二にして一」すなわち「フター-親」揃っているべきものであり、「カタ-親」であることは規範からの逸脱となる。そのため望ましくないものとしてマイナスの評価をとまなう。また、(31a)に見るように「カタ-親」という表現自体に談話を否定的な結論に導く傾向が備わっている。(31b)は不自然であり、皮肉やちゃかしとしてのみ可能である。

(31a) カタ親で育ったので、ひねくれてしまった。

(31b) ?カタ親で育ったので、りっぱな大人になった。

肯定的な結論に変えるには逆接の接続詞「が」が必要である。

(32) カタ親で育てられたが、りっぱな大人になった。

だが、親が二人揃っていることが規範とならない文脈もある。

(33) たとえば、わたしの家の近くに「白百合天使園」という養護施設があります。園児は未就学児童から中学三年まで八十名ぐらいいるらしいけど、そのうちの半分が孤児だそうです。... あとの半数の子には片親や親戚がある。(井上ひさし『十二人の手紙』149-150)

身よりのない子どもたち向けの施設で「フター-親」ともいない孤児と対比して「カタ-親がアル」という表現が用いられている。こうした状況では両親とも欠けているのがデフォートであり、そのため「カタ-親がアル」という断定が可能になる。

4. 最後に

以上、「カタ-」が「二にして一」なるものの一方、あるいは、その不在を意味する用法を考察した。印欧語における双数、および、ライズィの提唱する欠如詞に関わりが強く、生産力のある用法である。「カタ-」は双数

の一方を示す世界の言語でも稀な形態素であり、しかも、具体物に限って適用される印欧語の双数よりも意味の広がりの方が豊かである。今後は「カタ-」のような形態素をもたない言語ではどのような言葉の問題としてテーマ化できるのか、思考を重ねていきたい。

[注]

- * 本稿は現代日本語における接頭辞「カタ-」の用法を包括的に扱った藤田(2008)の一部をまとめたものである。併せてご参照いただければ幸いである。
- 1) ゆもと しょうなん(1977)の論考がとくに参考になった。
 - 2) 例(4)の「片泊まり」はいわゆる B & B (Bed and Breakfast) のことである。『時代別国語大辞典・室町時代編2』(1989)では「船が短時間停泊すること」と記載があり、時代により意味が変わったことがわかる。
 - 3) 三つのレベル分けはとくに泉井(1979, 9-10)から示唆を受けた。
 - 4) 徳永(1959, 27-30), 泉井(1978, とくに第二部), 工藤(2005 とくに2, 3章) 参照
 - 5) その理由を説明するには「もう」と「方」の考察が必要であり、本稿では扱えない。
 - 6) 夫婦茶碗でなくても、同じ茶碗二個を一つの全体(セット)と捉えれば「カタ-」の使用は可能であることを泉邦寿氏に指摘していただいた。その場合は次項であつかう「偶発的レベル」に造られた一対と捉えることができる。
 - 7) 双子の一方を言う場合、「兄・弟／姉・妹」の他に、次のような用例もある。
「そんなおりにあるプールで、一卵性双生児の片割れの^ゝかすみ、と出会う。^ゝかすみ、と妹の^ゝゆかり、は幼いころから入れ替わって遊んでいるうちに、互いの区別がつかなくなる時があった。」(池上冬樹、朝日新聞041114)
 - 8) 「ホウ(方)」については KAWAGUCHI(1994) 参照。
 - 9) 「独眼流伊達正宗」の「独-」もそれに近いだろう。
 - 10) 身体の規範と逸脱については田中(1994)、フィードラー(1999)、ルロワ(2006) 参照。
 - 11) 差別表現については塩見(1990)も参照。カタワの表記は「片端」が正しく、「片輪」は当て字とされるが、田中(2001, 132-133)の議論を参照。

[参考文献]

・辞書類

『日本国語大辞典』第二版, 小学館, 2001年 / 『時代別国語大辞典・室町時代編2』(1989)三省堂. / 『岩波国語辞典』(第6版) / 『新明解国語辞典』第3版 / 中村・芳賀・森田(編)(2005)『三省堂類語辞典』(『三省堂』) / 藤堂明保(編)(1977)『学研漢和大辞典』 / 白川静(1996)『字通』, (1097)『字訓』平凡社. / 佐々木喜代治(編)(1977)『国語学研究事典』明治書院. / 『言語学大事典』三省堂. 術語編

・研究書

- 泉井久之助(1978)『印欧語における数の現象』大修館書店.
- エルンスト・ライズィ(1994)『意味と構造』講談社学術文庫. 313p.
- 工藤進(1988)「日本語において複数とは何か」『群』, pp.2-13. (工藤進(2005)『日本語はどこから生まれたか』KKベストセラーズに再録).
- 斎藤倫明・石井正彦(1997)『語構成』日本語研究資料集. 1-13. ひつじ書房. 354p.
- 斎藤倫明(2004)『語彙論的語構成論』ひつじ書房. 286p.
- 塩見鮮一郎(1990)『新編言語と差別』新泉社.
- 田中克彦(2001)『差別語からはいる言語学入門』明石書店,(ちくま学芸文庫版(2012)に再録).
- 田中聡(1994)『衛生博覧会の欲望』青弓社.
- 徳永康元(1959)「fel szem(片目)考」『国語研究』, 國學院大學発行, pp.23-33.(『片目考——徳永康元言語学論集』汲古書院,2010に再録).
- レスリー・フィードラー(1999)『フリークス——秘められた自己の神話とイメージ』青土社
- ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(2006).『双数について』, 村岡晋一訳, 新書館.
- アルマン・マリー ルロワ(2006)『ヒトの変異——人体の遺伝的多様性について』上野直人(監修), 築地誠子訳. みすず書房.
- ゆもと しょうなん(1977)「あわせ名詞の意味記述をめぐって」in 斎藤・石井(1997), pp.176-191.
- KAWAGUCHI, J. (1994) : Altérité et comparaison : à propos de -*hoo* sino-japonais, *Cahiers de Linguistique Asie Orientale*, Linguistique et Asie Orientale, Mélanges offerts à Alexis Rygaloff, vol.23, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, Centre de Recherches linguistiques sur l'Asie Orientale, Paris, pp. 141-153.